侯　真平著

黄道周紀年著述書画考（上）（下）

山根　幸夫

著者の前言によれば、侯真平氏は一九八四年、恩師の厦門大学婁曽泉教授とともに、中華書局の依頼に応じて『黄道周年譜』の編修を始めた。因みに、黄道周については、清人の編した次の如き六点の年譜がある。即ち、洪思『黄子年譜』、荘起儁『漳浦黄先生年譜』、鄭亦鄒『黄漳浦年譜』、黄玉麟『黄忠烈公年譜』、荘亨陽『黄忠端公年譜』、金光耀『先儒黄子年譜集成』である。また、伝記も黄景昉『黄道周誌伝』以下、十余点がある。

侯氏は婁教授とともに『年譜』を完成したのち、更に資料を補充して、婁教授の支持の下に本書の草稿を完成したのは、一九九二年五月のことであったらしい。その後、草稿に修訂を加えて、原稿ができ上ったのは一九九四年六月のことであった。

本書が依拠した書籍・文章は三〇〇余点にのぼり、他に黄の書道作品二三一件、絵画二七件などをも採録し、単に「年譜」というだけでなく、彼の字号、親族、著述版本、書法作品、絵画作品についても詳細な考察を加えている。年譜に相当する部分は、「紀年考」と名付けられ、上巻の大部分を占めており、上述した恩師婁教授と共に編纂した年譜が基礎となっているのであろう。

「前言」では、著者の侯氏は、黄道周は政治上では正直敢言の浄臣、死すとも屈せぬ民族英雄・愛国主義者であり、学術上では明末の儒学大師で、博学広識、影響頗る大きく、宋明理学史上で一席の地を占め、芸術上でいえば、書法の面では、その行書、草書では独白のものを打ち立て、瀟酒超逸、当時名声がとどろき、且つ沈曽植、潘天寿、来楚生、諸楽三、沙孟海らの近代書道の名家に大きな影響を与えたとしている。著者が本書で重視しているのは、学術、芸術の面における黄道周の業績である。

一、『字号考』では、黄道周の字（六）、号（一七）、室名（四）、謚（三）について詳細に考察している。

二、『親族考』では、黄氏の始祖龐徳公をはじめ、高祖父遺安公、曽祖父黄宗徳、曽祖母林氏、祖父黄世懋、祖母翁氏、外祖父陳××、父黄季春（字嘉慶）、母陳氏、岳父蔡乾鑾、大伯父、二伯父、叔父、諸舅父、原配林氏、継室蔡玉卿、兄黄道琛（又名士珍）、姐など四九人の親族について、資料を引用しながら、具体的な事実を解明しようと

試みている。著者がもっとも多く引用しているのは、陳寿祺『黄漳浦集』であるが、他に『漳州府志』『漳浦県志』『龍渓県志』などもよく利用されている。しかし、充分な資料のない各親族について、一々解明することは非常に困難な作業ではなかったかと思われる。四〇番目に劉子民『尋根攬勝漳州府』を引用して「一九八三年仲秋、一個由十多位台湾同胞組成的尋根旅行団……到達福建省南端的東山島。旅行団中、有一位名叫黄易濤的女士……她説、我父親已経八十四歳、他一再交代、我們是明朝大学士黄道周的後裔、一定要設法找到祖地」と述べられている。侯氏は、現在海内外で黄氏の後裔あるいは族裔といわれる者は多数いるであろうが、自分は寡聞にして、その詳細を述べることはできない、と結んでいる。

三、『紀年考』は、前述したように、上巻の大部分を占め、下巻にまで及んでいる。侯氏は「本考は、道周の歴年の生活踪迹、政治活動、講学著述、書画創作の考証に関するもので、新編年譜と視るべきである。そこで年譜の体例を採用した。年代の不明確な著述、書画作品については、後述の〈著述版本考〉〈書法作品考〉〈絵画作品考〉を見てほしい」と述べている。著者が資料として用いた処は、黄道周本人、親友あるいは其の他の当事者の記述を中心にし、やむを得ない場合には、歴代の譜伝や史書を取って参考にした由である。記述方法の一例として、黄道周の五歳の条を引用してみよう。

万暦十七年（己丑、一五八九－九〇）五歳。入私塾、読《論語》。（以上、ゴチック）

《洪譜》本年〝入小学而慧、授《論語》、黄子曰、‘聖人只教人以読書、有子何教人以孝弟。聖人只教人老実、曽子何教人以省事。’問之授者、授者不能答也。〟

按年譜所据不詳、但以〝授者不能答〟看来、道周最初是受私塾教育的、後来才跟父親、胞兄読書。

右の如く、著者は各事項を述べるに当って、必ず丹念に依拠した資料を明白に示している。著者の屢々引用するのは、黄道周自身の文章の他、洪思、荘起儁の年譜、あるいは陳寿祺『黄漳浦集』などである。『漳州府志』『漳浦県志』もよく利用されているが、いずれも光緒刊本に拠っている。『漳州府志』について言えば、康熙刊本、乾隆刊本、『漳浦県志』についても、康熙刊本も利用すべきではなかったろうか。勿論、紀年考では、これ以外にも多数の資料が利用されている。『明史』をはじめ、『罪惟録』『石匱書后集』『南疆逸史』『明季北略』『明実録』『明季南略』『小腆紀伝』など、多数の資料を利用している。著者は、まず一つの事項を挙げる場合、いわば本文に相当する記事をゴチックで示し、次にその記事を示す資料を引用している。その後に、

著者自身の按文を掲げて、一そう詳しく事実を考察するとともに、関連する事実を補足している。実に周到な配慮が加えられており、信頼するに価する年譜と云うことができよう。（以上、上巻）なお、紀年考の最後の部分、弘光元年（隆武元年）と隆武二年の条は、下巻に収められているが、この二年間の記述だけで、一〇〇頁にのぼっている。黄道周の最期を述べた部分である。

四、『著述版本考』の冒頭において、侯氏は「道周一生の著述は宏富であるが、版本は複雑で、従来著録が往々散乱、謬訛しており、詳確な統計も考述もなく、頗る不便である。そこで、著者は北京、南京、上海、福州、漳州、厦門等の地で訪得した一二七種の、現存、或いは従来著録された道周の単行本著述を、学科或いは文体によって二一類（付録三類を含む）に分け、逐一その内容と撰寫・結集の時期、地点、背景、編刊者、存佚、版本などを考述した。この他の千件をこす単篇の詩文は、多くは上述の〈紀年考〉、或いは下述の〈書法作品考〉の中で考えるので、此処では贅述しない」と述べているが、これによって著者が〈著述版本考〉で意図している処は明瞭である。次に、二一類の内容について紹介してみよう。

（一）、『易』類（凡一三種）
（二）、『尚書』類（凡四種）
（三）、『詩経』類（凡五種）
（四）、『周礼』類（凡一種）
（五）、『礼記』類（凡九種）
（六）、『春秋』類（凡三種）
（七）、『孝経』類（凡七種）
（八）、『楽律』類（凡一種）
（九）、門業類（凡五種）
（十）、史学類（凡十一種）

史学類の十一種の著述とは、(1)与修『神宗実録』、(2)『懿畜編』、(3)『烈皇召対記』一篇、(4)増広評注『広名将伝』二〇巻、(5)輯訂明顧充撰『綱鑑歴朝捷録』一〇巻、明張四知撰『元朝捷録』五巻、明李良翰撰『国朝捷録』四巻、(6)増訂明蘇濬『綱鑑紀要』、(7)～(9)『興元紀略（一）』（別称『書留都播遷事』）、『興元紀略（二）』（別称『書二周事』）、『三事紀略』各一篇、(10)『潞王監国記』一篇、(11)『逃雨道人舟中記』一篇。

右のうち、(7)～(9)については、次のような解題がなされている。「これらはすべて歴史筆記類の著述で、記す所はすべて弘光朝の軼聞である。そのうち、『興元紀略（一）』は大概弘光朝の党争について述べ、『興元記略（二）』は、専ら阮大鋮が復社領袖の周鑣、周鍾兄弟を誣殺した事件を記している。『三事紀略』には、「妖僧」「偽太子」「偽皇后」

の三件について記している。

（十一）、制芸類（凡六種）
（十二）、時論類（凡四種）
（十三）、奏疏類（凡二種）
（十四）、類書類（凡二種）
（十五）、詩賦類（凡十三種）
（十六）、書法理論類（凡九種）
（十七）、尺牘類（凡二種）
（十八）、類別待考類（凡三種）
［附一］、為時人選編詩作類（凡一種）
［附二］、翻刻古籍類（凡二種）
［附三］、後人整理的別集類（凡十三種）

右の著述、版本の考察に関しても、著者は厖大な資料を利用している。『四庫全書総目提要』をはじめ、黄道周の著で、後人が編修した『黄漳浦集』『石斎十二書・黄子録』『石斎先生経伝九種』『黄石斎未刻稿』『蔡夫人未刻稿』等は当然のこと、実に広範囲の資料が利用されており、黄道周の著述について、一々詳細な解題を試みるだけでなく、版本についても、その現存するものを明記し、抄本にまで及んでいる。黄道周の著作について調べる場合には、絶対に参考にしなければならぬ貴重な資料である。なお、著者は後考を待つ書として、次の八点を挙げている。

(1)清蔡世遠『摹刻黄石斎先生遺書』
(2)清呉栄光編刊の文集五十余巻
(3)清陳寿祺抄得の『逸文』一巻
(4)『明史芸文志』著録『石斎集』十二巻
(5)『四庫採進書目』著録の『石斎集』
(6)『明人伝記資料索引』著録の『石斎集』
(7)『増訂四庫簡明目録標注』著録の『石斎全書』
(8)『道周代言集』

五、『書法作品考』は、黄道周の手になる書迹について（その中には巻軸、扇面、匾額、楹聯、摩崖、碑銘の類だけでなく、手稿、尺牘、題識まで含む）、その一点一点ごとに、その用紙（絹本、綾本、紙本など）、形状、制作年代、収蔵場所、著録文献などを具体的に考察している。而して、全体を現在存在する書迹と、前代に存在していた書迹とに分類する。前者を年代の明確な書迹（七四種）、年代が曖昧な書迹（二四種）、年代を検討すべき書迹（五三種）に分類している。即ち、現在黄道周の書とはっきりわかるものが一五一種ある。他方、後者即ち前代に存在していた書迹を、年代が明確な書迹（五六種）、年代は曖昧だが、前代に存在した書迹（一五種）、年代を確定しなければならぬ書迹（九種）に分けている。併せて八〇種存在していたことがわかる。

右のうち、年代の明確な書迹の収蔵者を数えてみると、やはり故宮博物院が最も多く、一五種を収蔵しており、次に上海博物館の十種、天津市芸術博物館が五種である。残りはすべて一、二種を有するものであるが、北京文物書店、南京博物館、広東省博物館、日本の東京国立博物館などである。個人所蔵に係るものも何種かあるが、その中には「東京赤羽雲庭」蔵の「曹遠思推府文治論」も収められている。個人の収蔵品については、著者はその調査年代を明示していないから、現在も本書に記された収蔵者の手中に在るか否かはわからない。なお、著者は日本における黄道周の書迹の存在については、伏見冲敬著、陳志東訳『中国歴代書法』、および赤井清美『中国書道史』を参照したらしい。日本に所在するものに対しては、より周到な調査が必要であるかも知れない。

一人の書家の書迹について、これほど丹念な調査が為されたことは、珍しいことではあるまいか。このために費やされた著者の努力は実に大変であったろうと思う。しかし、今後も更に調査を加えて、より完全なものにして頂きたいものである。

最後の六『絵画作品考』には、二七種の作品が掲げられている。作品名、制作年代、収蔵者名などを列挙しているが、現在の収蔵者のわからないものが多いらしい。『書法作品考』に比べると、本章の占めるスペースはわずかに一〇頁にすぎず、その重要性は少いわけである。

最後に、著者が本書を著述するに当って利用した『引用文書』三一一点を列挙している。黄道周自身の著書をはじめ、劉正成主編『中国書法鑑賞大辞典』、周倜主編『中国歴代書法鑑賞大辞典』、李名方・常国武編『中国書法名作鑑賞辞典』、梁披雲主編『中国書法大辞典』、王玉池主編『中国書法篆刻辞典』、岑久発主編『書法篆刻実用辞典』、范韌庵、李志賢編『書法辞典』なども引かれている。日本人の著書としては、前述した伏見冲敬、赤井清美の両書の他、『日本学術資料総目録』、『東洋学文献類目』（一九七五年）を挙げているが、『東洋学文献類目』については、各年度のものを利用すれば、より多くの資料を入手することができるのではないかと思われる。

以上で述べた如く、本書の中で著者が最も力を注いだのは「紀年考」であり、次いで「著述版本考」および「書法作品考」であるが、特に「紀年考」のスペースは、本書全体の五八％ちかくを占めている。いわば、著者は黄道周の年譜を最も重視していたことになる。従来、六種の年譜（前述）もあったが、著者はそれらを集大成すると共に、一つ一つの記事について、厳密にその記事の典拠を捜して正確を期している。特に、「紀年考」「著述版本考」ではこ

のような配慮が拂われている。黄道周の年譜としては、本書は最良のものである。彼の著作に関しても、「著作版本考」が最も詳細な行届いた考察である。「書法作品考」はきわめて珍しい考察であり、スペースはそれほど多くないが、著者が随分苦心した部分ではないかと考えられる。

今後、黄道周を研究しようとするすべての研究者にとって、本書は非常に重要な文献である。殊に、彼の思想・文化的な面を考察しようという場合、絶対に欠かすことのできぬ貴重な文献である。著者侯真平氏が、本書を完成するために拂われた努力に、心より敬意を表したい。

（一九九五年一月、厦門大学出版社、A五判、七六八頁）